

発表種別：研究発表
発表希望月：12月

東京藝術大学大学院博士後期課程
衣笠詠子

長唄の伝承に用いられる記譜の特徴
—明治末期から大正初期に刊行された2種類の楽譜の比較を通して—

本研究は、同時期に別の記譜法に基づいた長唄伝習用楽譜を刊行した北村季晴（1872～1931）と江本舜平（1886～1923）が明治期における邦楽曲の五線譜化事業に採譜者として従事したことに着目し、それぞれに出版された楽譜を比較検証することで江本による記譜法が指導者に受け入れられ、現在も広く伝習に用いられている要因を明らかにすることを目的とする。

日本音楽において楽譜が伝習に使用されるようになったのは、明治期における西洋音楽の流入による影響が大きい。それまで口伝を中心とした伝承が行われてきたが、情報の伝達には曖昧さがあった。音楽取調掛が文部省内に設置されると、日本音楽の伝承の実態や実状の調査、研究、保存のため、まずは箏曲と長唄の「解剖」に着手した。また、国家的事業だけでなく、物理学者の田中正平（1862～1945）や福岡を中心に活動していた井上才蔵（1870～1936）などによる個人の邦楽研究所も各地で設立され、日本音楽の調査、研究がなされた。いずれの研究機関においても、口伝を中心に伝承されてきた日本音楽の可視化が不可欠とされ、楽曲の五線譜化が急がれた。

『長唄楽譜』（1901）の著者北村季晴は、東京音楽学校師範部卒業の後、前記の田中正平邦楽研究所の他、邦楽調査掛においても日本音楽の五線譜化を行っており、長唄の古典曲を五線譜で書き表した楽譜を出版した。独自の記譜法に基づいた『長唄新稽古本』（1917）を出版した江本舜平もまた、田中正平の下で音楽の素地を学び、日本音楽の五線譜化の従事者であった。彼らの音楽歴や記録から、両者とも洋楽・邦楽の知識を十分に持ち得ていることが分かる。しかし、同じ流れを汲む演奏者による演奏を採譜した記録や、直接楽曲を習った可能性があるにもかかわらず、それぞれの記譜法には様々な違いが見られる。

本研究では北村の『長唄楽譜』と江本の『長唄新稽古本』から同曲を分析対象とし、それぞれの記譜法の特徴と記譜情報を比較する。楽譜に書き記した情報と、捨象された情報を分析することにより、長唄の伝承において必要な情報が何であったのか、江本の楽譜がどのような点で伝習時に好都合だったのか、その要因の一端を明らかにしたいと考える。